紅葉合

ことをよめりける、いま〳〵しき事と人申けるほどに、宮やがてうせ給にけり、

〔藤原光經集〕内裏女房花合にまけて、花にさしていだすべき歌こひ侍しかば、

吹風も治れる世は音もせでのどかに匂ふ花ざくらかな

〔清原元輔集〕村上の御時に、紅葉合殿上人にせさせ給ふに、

わが思ふくらぶの山のもみぢばにおとらぬものはこゝろなりけり

〔藤原清正集〕うちの紅葉あはせ、九月ふたつあるとし、

くれなゐのやしほの色はもみぢばの秋くはゝれる年にぞ有ける

道具競

〔拾遺狂言記五〕鎧

罷出たる者は、此邊りに住居いたす者でござる、此間のあなたこなたに、お道具くらべはおびただしい事でござる、それにつき此度は、よろひをくらべさせられうとある、身どもの内によろひがあるか存せぬ、まづ太郎冠者にたづねうと存ずる、

扇合

〔紀貫之集七賀〕恒佐中納言殿の扇合の歌、すはまに入たり、

住の江の松のかせをもこめたればあふぐ扇のいつか絶せん

〔圓融院扇合〕宮の御方にうへおはしましてらごとらせ給ひて、かたせ給へるかちわざ、六月十六日にうへせさせ給ふ、梅つぼにわたらせ給へるに、殿上人中少將をはじめてとりつゞきまいる、南は御すだれより外にあげて袖ぐちどもとりいる、玄たんのをきくちしたるらてんの御筥に、緋扇十枚入させ給ひて、からのうすものゝすはうのすそごのさいでにつゝみて、おなじ紫のくみして、白がねを桔梗をみなへしの枝に造りて付させ給へり、白がねこがねのこものしたに、からの羅をあゐ色に染て、ひとへにてはれるもぬへるもあしでにて、

君が代をまつふく風にたぐへてぞかへすちとせのためし也ける